

研究覚え書き

インドの仏教聖地、ブッダガヤの大菩提寺境内の東側に小さな建物がある。そこには直径約174センチ、高さが約28センチの円柱状で、灰色を帯びた黒色の石造物が安置されている。面の中央部分は欠損しているものの、それ以外の部分ではそこに種々の文様が刻まれている事がわかる。その面の形状が円である事、幾周もの外縁の帯に囲まれた外陣、門、内陣という構図、またそこに刻まれた文様、図像などから、この石造物が仏教のマンダラであると推測できる。

この石のマンダラを持つ文様の中で最も特徴的なものは、「転輪聖王の七種の宝物」と言われる七種類の図像(車輪、象、馬、宝石、女性、大臣、將軍)であろう。これらのモチーフは仏陀と転輪聖王の観念を結びつけるシンボルとして起源はきわめて古く、定型句的にパリー仏典にも現れており、南インドの種々の仏教遺跡にも見られる。地域や成立の時期によりモチーフの形やスタイルに異なりがあることはいうまでもないが、いずれも仏教とその在地王権との融合を示すシンボルであり、

ブッダガヤ・大菩提寺の石刻マンダラ

ジェームズ・B・アップル

当該地域の支配を示すマーカー(標識)といえる。ブッダガヤにおける石刻マンダラの宝物モチーフのスタイルや技法は、8世紀から12世紀にかけて東インドを統治し仏教を保護したパーラ・セナ王朝期の工芸に特徴的に見られるそれと一致しているところから、この石刻マンダラもまた仏教と融合した王権の正統性と力を誇示するパーラ王朝のモニュメントとして、またおそらくはその聖的威力による攘災への期待も受けて、大菩提寺という仏教聖地に置かれたものである。

従来、マンダラは仏陀の最高の悟りの世界を二次元、または三次元に幾何学的に表したもののという、サイコーコスモグラム(精神―宇宙図像)の観点から主にアプローチされてきた。しかし、石という堅牢なオブジェクトに刻まれたこの大菩提寺の石刻マンダラは、マンダラ研究に社会文化的、政治的、また地政学的な観点からの新たなアプローチを与えてくれるものとして注目される。

(J. B. Apple カナダ カルガリー大学准教授)

(抄訳 アップル荒井しのぶ)